

守りたい心に残る三重の風景



私たちが日々を過ごす中で、いつまでも心に残る風景があります。それは、悠久の時をかけて造り出された大自然の絶景だったり、何気なく毎日見かける町並みであったりもします。多彩で豊かな自然、歴史ある建造物などが残る三重県内には、こうした風景が数多く存在します。

今回は、地域のすばらしい風景を守り、未来へ受け継ごうと活動している人々をご紹介します。活動内容は、それぞれですが、貴重な自然・歴史を愛し、誇りに想う気持ちに変わりはありません。

※各グループの活動日程・場所・受入れ人数・また、各イベントや祭りなどの日程・場所などは変更になる場合がありますので、事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美
撮影：……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

多くの命を育む木曽三川を守る

NPO法人 木曽三川ごみの会

桑名市長島町

三重県の東北端を流れる木曽川・長良川・揖斐川を、私たちは親しみをこめて「木曽三川」と呼びます。それぞれ源流も異なる3筋の川は、多くの養分を含んだ土砂を河口部へ、さらに伊勢湾へと運び、多種多様な命を育んできました。

現在、木曽三川流域では、環境保全に取り組む市民グループが数多く活動しています。その中で、桑名市長島町を中心に活動しているのが、NPO法人「木曽三川ごみの会」です。

「毎月1日と15日、台風や雪の日以外は、堤防の清掃活動をしています」と、同法人の事務局長の佐野隆蔵さんに教わり、本年7月1日の午前7時30分、長良川と揖斐川が合流した河口部の堤防へと向かいます。すると、すでに大勢の人々が清掃活



中川 育夫さん(左)と佐野 隆蔵(右)さん

動の真つ最中。中には7時ごろから作業している人もいと聞きました。

「数日前から、漂着ゴミの様子をパトロールして決めるから、清掃場所はその都度変わります」と、専務理事の中川 育夫さんから教わります。お話を聞いている間も、作業は黙々と続けられ、それぞれが手にするゴミ袋には、ヨシなどの漂着ゴミや釣



市川 茂さん※

り客が捨てたペットボトルなどが詰め込まれています。315回目となるこの日も、木曽三川に関わる国土交通省・県・市の職員、さらに民間企業の方々が加わり、総勢49名が参加。2トントラック3台分のゴミと軽トラ1台分の流木が回収されました。

清掃活動終了後、同法人の事務局へ伺うと、まず目に留まったのが入口の看板。一見すると木のオブジェのようなのですが、平成18年に回収された流木だと教わります。このような流木や漂着ゴミが、漁船などに及ぼす影響を考えると、活動の意義を実感します。



NPO法人「木曽三川ごみの会」事務所入口に置かれた流木



河口で採れたウナギを観察する環境学習の様子※

同法人が結成されたきっかけは、平成9年ごろに市川 茂理事長が仲間と一緒に河川や長良駅前を清掃したことでした。法人資格取得は平成18年。現在は活動の幅が広がり、たとえば岐阜県のグループなどと交流して、長良川上流の清掃活動に参加し



木曽川下流域を赤く染める朝日※



清掃作業の様子



ゴミ袋に黙々とゴミを詰め込んでいく。



清掃活動を終えた皆さん

たり、年に1度は伊勢湾のゴミが大量に漂着する鳥羽市の答志島に赴くといひます。また、夏休み期間中に開催される周辺地域の子どもたちへの環境学習にも協力。子どもたちを船に乗せてあげると、普段見ている景色と違うため、来年も来たいなと喜んでくれるといひます。

「朝7時ごろに河口に来ると、シジミやハマグリ漁の船が一斉に出航する様子が見られますよ」。

不法投棄パトロールなどの合間を縫って写真撮影を楽しむという佐野さん。美しい写真の数々を見せていただくと、この川や海を守るためには、雨や風の日でも清掃活動を休むわけにはいかないという覚悟が伝わってくるような気がしました。

お問い合わせ

NPO法人「木曽三川ごみの会」
TEL 090・8546・5517

(佐野 隆蔵さん)

※印の写真は取材先から提供していただきました

1000年の時を生きた「長太の大きくす」を保護

大きくす保存会

鈴鹿市南長太町

近鉄名古屋線「長太ノ浦」駅と「箕田」駅の間地点辺りで車窓から西側を見ると、田園風景の中に立つ1本の大木に気がきます。地域の人々が「長太の大きくす」「あるいは単に「大きくす」と呼び親しむクスノキです。ひときわ目を引く姿は、明治22（1889）年成立の『伊勢名勝志』に「遠望恰毛傘形ノ如シ」と記されました。樹齢は1000年を超えるともいわれ、かつては、この木を中心に大木神社の社域があったと伝わります。



「長太の大きくす」（県天然記念物）

同保存会を結成するきっかけとなったのが、前年にこの地域を襲った台風と、干ばつ被害が重なり、



杉野 博祥さん

「毎年、台風シーズンになると、気がかりですよ」と話すのは、杉野博祥さん。平成17年に結成以来、保護管理を行う「大きくす保存会」の会長でいらつしやいます。当時、南長太第一自治会の会長を務めていた杉野さんが、



夏季干ばつ時の水やり※



草刈り作業※



土壌改良の様子※

樹勢が一気に衰えたのです。そこで、当時、管理に携わっていた樹木医のアドバイスなどもあり、地域に呼びかけて保存会を作ることになったのです。

保存会結成以来、「大きくす」周辺の草刈り、夏季干ばつ時の水やり、土壌の保水に役立ち、有機肥料ともなる藁敷き詰める藁敷きなどを定期的に行うほか、状況に応じて大規模な土壌改良を実施するなどの活動が続けら

れました。それらが実を結び、「大きくす」の勢いは徐々に回復。平成24年には、鈴鹿市が市制70周年を記念して制定した「重要景観樹木」にも選ばれました。

また、同保存会では、同26年から9月の連休中にライトアップしたり、長太小学校4年生が課外授業の一環で「大きくす」を勉強する際に協力したりと、さま

ざまな活動をしていらつしやいます。「かつては、どこから見ても傘のようでしたが、今では南側や北側からだとも、西側に傾いて

いるように見えます。それでも、すばらしい木に変わりはないし、今でも毎日参拝に訪れる人もいます。私も2日に1度は様子を「見に行きます」と熱く語る杉野さんに見送られて、「大きくす」へと向かいます。その根元まで近付くと、改めてその大きさに驚きました。記録では、樹高は約26メートルですが、より高く感じます。また、枝張りが東西30メートル、南北約35メートルですが、さらに大きく張り出しているように感じるため、包み込まれるような安心感があります。それでも、葉の1枚1枚は意外と小さくて、葉擦れの音がシャラシャラ、シャラシャラと優しく聞こえました。

1000年もの間、風雪を耐え抜いた「大きくす」は、これからも傘のように地域の人々を守ってくれることでしょう。

お問い合わせ

「大きくす保存会」

TEL 0599・385・2117



根元近くから見上げた「長太の大きくす」

※印の写真は取材先から提供していたものです

日々の暮らしを営みながら、旧東海道・関宿の魅力語る 関宿案内ボランティアの会

亀山市関町

軒を連ねる間口の狭い町屋、白い漆喰で塗り固めた虫籠窓、瓦屋根の付いた立派な看板…。旧東海道の宿場町の面影を随所に残す関宿を歩くと、今にも江戸時代の町人たちに出会えそうな気がします。

「はつきり言って、生活するには不便なことがありますよ」と率直に話してくれるのは、この町に生まれ、現在も日々を過ごしていられつしやる岩間 俊彦さんと、落合 貢さん。関宿の町並み保存が検討されるようになったのは、半世紀以上前のこと。当時、お二人はまだ中学生でしたが、親世代が議論を重ねていたのを覚えていたといいます。その結果、保存に決定。昭和59（1984）年に、東海道の宿場町の中では唯一、「国の伝統的建造物保存地区」に選定され



岩間 俊彦さん(左)と落合 貢さん(右)

ましたが、各家の改築・新築の際にも一定の制限がかけられるなど、不便を感じることも多々あったことでしょう。

実は、岩間さんは「関宿案内ボランティアの会」の会長、そして落合さんは理事を務めます。お二人にとって、当たり前だと思っていた町の風景が、貴重で

すばらしいものだと思感するのは、案内した観光客の「ええとこやな」「また来たいなあ」などという言葉だといいます。また、看板の名称が京都方面から見ると漢字で、江戸方面から見るとひらがなで書かれているのは、進む方向を間違わないようにする工夫だと説明すると、「いい勉強になったわ」などと喜ばれるといます。お二人の話を伺っていると、誇りに思っていることが伝わってきます。



進む方向によって漢字とひらがなで書かれた看板

平成12年に結成された同会は、今でも毎月第2土曜日に勉強会を開き、新たな魅力の掘り起こしにも取り組んでいます。その中で最近、見慣れた樹木2本が、実は大変貴重なのだとわかったと伺い、案内していただきました。その1本が関神社のウラジロガシ。入口の石段上から、手前に覆いかぶさるように張り出す姿は、迫力十分。住宅地でこれだけの大本があるのは珍しいとのことですが、現在樹勢が衰えているのが気かりとのことでした。それでも1本は、



関神社のウラジロガシの樹高は約12.5メートル

によって、関宿に新たな魅力が加わりました。関宿には、春の「東海道のおひなさま」「夏の「関宿祇園夏まつり」など、見逃せない



関神社の御旅所に立つトウカエデ

関神社の御旅所に立つトウカエデです。御旅所とは、祭礼の時に神輿がしばらく鎮座するところですが、ここに立つトウカエデの幹周囲が2.62メートルあり、樹木医の調べで県内一の太さだということが判明したのです。皆さんの不断の努力に



「関宿祇園夏まつり」※

写真提供：亀山市



関宿の町並み

お問い合わせ

祭りやイベントもあります。加えて、秋の「東海道関宿街道まつり」も必見です。本年の開催予定日は11月5日(日)。一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

亀山市市民文化振興局
まちなみ文化財室
TEL 0595・96・1218
「関宿案内ボランティアの会」
(関宿旅館玉屋歴史資料館)
TEL 0595・96・0468

※印の写真は取材先から提供していただきました

住民憩いのクロマツの並木道が続く、阿漕浦海岸を見守る NPO法人 居宅支援システム実践 (旧「阿漕浦友の会」)

津市阿漕町

津市の阿漕浦海岸に沿って続くクロマツの並木道を歩くと、高さ5メートル以上の木々に混じって、3メートル程度の若木が見られるのに気付きます。



クロマツの若木

「7年前に市内の小学生が卒業記念に植えたものです。もうこんなに大きくなりましたね」。クロマツの若木を慈しむように見つめるのは、中尾 正己さんと小宮 英一さん。二人は、荒地地となっていた阿漕浦海岸を、以前の風光明媚な地に戻すために尽力した、旧NPO法人「阿漕浦友の会」の会員です。平成7年に結成され、松並木の再生な



小宮 英一さん(左)と中尾 正己さん(右)

どを行った同会の活動は、現在は、NPO法人「居宅支援システム実践」(久米 宏毅理事長)が受け継ぎ、中尾さんは副理事長、小宮さんは社員として、引き続き同海岸の保全維持に携わっています。

「私たちは、公益社団法人『三重県緑化推進協会』の森林ボランティア活動もしています」と教えてくれるのは、松専門の松保護士でもある中尾さん。海岸で森林とは思議ですが、このクロマツ林は、森林として認められているのです。つまり、皆さんの長年の植樹・保全活動が認められたという証でもあるでしょう。

「ここは、県立の自然公園ですから、バーベキューなどで火を使っではいけないのですが、知られていないのが残念です」と話すのは、小宮さん。お話通り、鈴鹿市長太ノ浦から、津市香良洲浦にかけての伊勢湾沿いは、昭和28(1953)年に「伊勢の

海県立自然公園」に指定されました。しかし、時に火を使った跡などが残っていることもあるといいます。

これからも不定期ながら、見回りや清掃活動が続けると話す小宮さんと、傍らで鎮く中尾さん。その姿は、潮風に耐えてたえずクロマツのように見えました。

お問い合わせ

NPO法人「居宅支援システム実践」
TEL 090・1099・5623
(小宮 英一さん)



清掃活動の様子※

希少海浜動植物の宝庫、白塚の浜を愛し、守る

津市白塚町

白塚の浜を愛する会

阿漕浦海岸の少し北に位置する白塚の浜は、同じ津市内の海岸でも、浜の雰囲気違います。堤防から見ても、打ち寄せる波が見えませんが、それもそのはず、砂浜の奥行きが長く、140メートルあるのです。その分、砂の量が豊富で、多くの希少な海浜生物を育む、稀有な海岸となりました。

「今は、シロチドリが営巣中だから、ここから先には入らないでください」と話すのは、西口 恵子さん。平成7年に結成されてから、浜の保全活動に取り組み「白塚の浜を愛する会」の代表です。

西口さんからは、シロチドリに続いて、カワラハンミョウ・ヤマトマダラバッター・ビロード



西口 恵子さん

テンツキなど、次々と聞きなれない生物の名前が飛び出します。いずれも三重県内の絶滅のおそれがある生物種のリスト『三重県レッドデータブック2015』に記載されている生物ばかり。この浜の重要さがわかります。

「奇跡的に残った砂浜に適した生物たちが多く棲んでいます。中には、絶滅したと思われる生物が見つかったこともありますよ」と話す西口さん。自然に対して謙虚に向き合い、正しく理解することが大切だと教わります。

時折、産卵に訪れるアカウミガメのバトロールや、毎月第3日曜日に海岸清掃を行う同会の



アカウミガメのバトロール活動「アカウミガメみつけ隊」※

活動に、最近では、若い大学生などの参加が増えてきたといいます。中には県外からやって来る人もいますと聞きました。

「最初は、子どもの頃に遊んだ浜を残したいということから始めた活動ですが、みんながいるからここまで続けられました」と明るく話す西口さん。西口さんの想いは、次代を担う人々の心にも届いているのでしょう。

お問い合わせ

「白塚の浜を愛する会」
TEL 090・7605・2102
(西口 恵子さん)

※印の写真は取材先から提供していたものです



香落溪の絶景ポイントの一つ、夫婦山の紅葉※

香落溪を訪ねると、あちこちで目にすることが出来ます。屏風岩・天摩嶺・鬼面岩など、特徴がある奇岩の名称などを説明した案内板が設置してあるのです。そしてこれらの名称や内容は、可能な限り『遊香落澗記』の内容に沿ったものにしたと伺いました。『遊香落澗記』とは、江戸時代後期に名張藤堂家の家老を務めた鎌田梁洲（1813～75）が

を主宰しています。約150名の生徒たちと周辺を散策して写真撮影したり、時には清掃活動などをする傍ら、香落溪のすばらしさをもっと知ってもらいたいと思っていたといえます。そんな時、出会ったのが長井さん。他県から移住してきた長井さんは、一目で香落溪に魅了され、連日のように写真撮影していました。二人の出会いが縁となり、有志を募って結成したのが「名張市の名勝 香落溪を身近にする会」でした。

同会の活動は、実際に香落溪を訪ねると、あちこちで目にすることが出来ます。屏風岩・天摩嶺・鬼面岩など、特徴がある奇岩の名称などを説明した案内板が設置してあるのです。そしてこれらの名称や内容は、可能な限り『遊香落澗記』の内容に沿ったものにしたと伺いました。『遊香落澗記』とは、江戸時代後期に名張藤堂家の家老を務めた鎌田梁洲（1813～75）が綴ったもの。大自然を愛した鎌田梁洲は、それまで人々が足を踏み入れなかった、赤目四十八滝や香落溪を訪れました。前者の印象や感動を綴ったのが『観瀑図誌』、後者が『遊香落澗記』です。

また、長井さんが撮影した写真などはパンフレットや1冊の本にまとめられ、『日本百景名勝香落溪の絶景を歩く』として刊行されました。美しい写真を見ていると、長井さんのあふれる想いも伝わってきます。

お問い合わせ

「名張市の名勝 香落溪を身近にする会」
TEL 0595・63・3028
（山口繁一さん）

※印の写真は取材先から提供していただきました



屏風岩近くに設置された案内板

「香落溪は、県道81号線でドライブできますが、本来のすばらしさは、空き地に駐車して車から降りて見ないとわからないですよ」と教えてくれるのは、「名張市の名勝 香落溪を身近にする会」代表の山口繁一さんと副代表の長井智彦さん。随所で見られる断崖絶壁の柱状節理の川面からの高さは約200メートルあり、車窓からは人工の常緑樹の上にある絶景に気付

かず、通り過ぎる人が多いのだといえます。幼少の頃から香落溪に親しんできた山口さんは、希少な花々に造詣が深く、市内で運営する「まちかど博物館・自然の花博物館」で、「花見つけ自然教室」



青蓮寺湖湖畔から香落溪方面を望む。

花見つけ自然教室 名張市の名勝 香落溪を身近にする会

名張市青蓮寺

名張市南部、青蓮寺湖一带は、家族や仲間たちとの行楽に格好のスポット。この青蓮寺湖に架かる香落橋から、青蓮寺湖の上流に沿って約8キロメートル続く溪谷は、香落溪と呼ばれ、赤目四十八滝（国指定名勝）と並ぶ紅葉の名所です。



長井 智彦さん



山口 繁一さん



田植え作業※



みやがわ森選組 交流施設「修遊館」



里山の風景が続く栗谷地区



農業インターンシップ体験中の学生たち※

林業従事者育成を主目的にしていた「林業のススめ」は、さらに対象者の幅を広げ、現在は県やイオン株式会社と連携して「森びと養成講座・森つなぎプロジェクト」を実施しています。森林や林業についてのセミナーやチェーンソーなどの機械器具を使った実地研修はもとより、学んだことを社会に還元する方法を考えるワークショップ、都会の人々に森の恵みを伝えるためのフィールドワークなど、林業の入口から出口までをトータルに考えることができる「森びと」養成をめざします。この秋もす

一方、後者のNPPは、現在、兵庫県の甲南大学の学生を中心に実施。町内栗谷地区にある、みやがわ森選組・交流施設「修遊館」前にある田んぼで農業体験を行います。

どの作業から、米の販売計画を立て、売るところまでやってもあります。最初は、田んぼにいる虫が怖くて「キヤ〜」とか言っていた子たちも、秋には順応して平気な顔して「すよ」と楽しいエピソードも披露してくれるお二人。ここでの体験は、学生たちにとって、大切なものとなるでしょう。



「森びと養成講座・森つなぎプロジェクト」参加の皆さん※

「なんて美しい谷がいつぱいあるところだろう...」。移住先を求めて全国を探し回り、平成15年に大阪から現在の大台町(旧宮川村)に移り住んだ岡本雄大さんは、初めて訪れた際に、こう思ったそうです。その後、林業に携わることになった岡本さんが、若手林業家やインターン者たちと結成したのがNPO法人「みやがわ森選組」です。



岡本 雄大さん

5年の間に植樹したのは、約8100本。かつて町内の山にはスギが多く植林されましたが、今回は、クリ・ヒメシヤラ・トチノキ・モミジなど、宮川流域に生えているものを中心に40種類が植えられました。その間、およそ4000人のボランティアが参加したといえます。

その後、若手林業家の育成やNPP(農業インターンシップ)などと、活動の幅が広がります。前者は、林業に真剣に取り組むたい人を対象にした「林業のススめ」で、道具を使つての伐採体験



伊藤 庸司さん



伐採体験の様子※

「森びと」を養成し、大台町の森・里山再生をめざす
NPO法人みやがわ森選組
多気郡大台町

に残る台風21号の被害は甚大でした。これを契機に、まずは森林保全活動を中心に活動すること。同17年からは「(財)イオン環境財団」の災害跡地への植樹(5か年計画)を受託運営することになりました。

※印の写真は取材先から提供していただきました



木の温もり漂う「横山ビジターセンター」内



「伊勢志摩国立公園」で採集された昆虫の標本展示



タイドプールでの生き物観察※



秋から冬にかけての富士山遠望※

ドブール(干潮時に海辺の岩場にできる潮だまり)での生き物観察などですが、中には、お二人の話通り、お茶摘み体験、しめ縄作りなど、地域の人々の歴史や文化を学ぶことができる企画もあります。

なお、こうした観察会で講師役を務めることに加えて、センター周辺の草刈り、コースチェックなどの美化清掃や設備の補修、花や昆虫などの調査・情報発信

を行うなど、自然と人の橋渡し役をするのが、「伊勢志摩国立公園パークボランティア連絡会」の皆さん。同センターでは、鳥や植物などのエキスパートを含め40名以上のパークボランティアが在籍。中には県外から通う人もいと伺いました。

季節は、実りの秋。「自然観察会」では、11月18日(土)開催の「南伊勢町の秋を訪ねるウォーク」に続いて、同月25日(土)に「サトウ

キビ収穫体験」が予定され、その後も、多彩な企画が続きます。参加申込み受け付けは、いずれも開催日の1か月前から。「自然観察会」に参加して、麻生さんが文化と歴史が、自然の中に溶け込んでいると表現した「伊勢志摩国立公園」を満喫してみたいかがでしょう。

お問い合わせ

「横山ビジターセンター」(火曜日休館)
TEL 0599・44・0567



横山展望台から望む英虞湾

青くきらめく海面に浮かぶ大小の島々、複雑に入り組んだ英虞湾の海岸線、整然と並ぶ真珠筏…。志摩市阿児町横山にある横山展望台からの眺めは、見どころが多い「伊勢志摩国立公園」の中でも屈指の絶景スポットとして知られます。

「実は英虞湾の景色は、早朝に見るのが一番。朝焼けの中、海上から真珠貝のような形の朝日が昇りますよ」と話すのは、伊藤芳正さん。環境省の委託を受け「横山ビジターセンター」の管理運営を行う「伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会」の事務局長でいらっしゃいます。伊藤さんからは、志摩市・伊勢市・鳥羽市・南伊勢町一帯を含む「伊勢志摩国立公園」は、

その96パーセントが民有地であるため、自然と人が織りなす歴史や文化にも触れることができる、珍しい国立公園であることなどを教わりました。

また、この日はアクティブ・レンジャーの麻生里衣さんにも話を聞くことができました。アクティブ・レンジャーとは、国立公園のパトロール・調査や自然解説などを行う、国立公園保護管理企画官を補佐する環境省の職員。これまで海外生活を長く続けたという麻生さんは、海外に比べて日本の方が、自然を身近に感じられるといいます。たとえば、里山の暮らしなど、人と自然が共存する文化が根付いているように思うと話してくれました。

国立公園保護管理企画官やアクティブ・レンジャーなどと連携して、同国立公園の情報を発信する「横山ビジターセンター」では、年間20数件の「自然観察会」を開催し、いずれも人気を博しています。具体的には、たとえば新緑の横山を歩いたり、タイ



麻生 里衣さん(左)、伊藤 芳正さん(中央)、スタッフの橋爪 美樹代さん(右)

文化と歴史が自然に溶け込む「伊勢志摩国立公園」の情報を発信

伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会

伊勢志摩国立パークボランティア連絡会

志摩市阿児町

海岸沿いに続くビン玉の明かり「ビン玉ロード」を引き継ぐ 浜島旅館組合

志摩市浜島町

ある夏の日の夕刻、志摩市浜島町の「目戸小公園（るぶる）」から、海岸沿いを南東へ歩くと、足元などを照らすビン玉の明かりに出迎えられました。ビン玉とは、マグロの延縄漁などのウキとして使われていたガラス玉のこと。場所によって、光がユラユラと点滅しますが、いずれも淡く優しいため、空に瞬く星の輝きを遮ることもありません。明かりを頼りに歩いていると、穏やかな気持ちになりました。

『ビン玉ロード』は、現在約1キロメートルに渡って続き、その数は350個です。最初は若い人たちが始めたのを旅館組合が引き継いだのです」と教えてくれるのは、ペンションオーナーで、「浜島旅館組合」の組合長を務める谷水平雄さん。説明通り、かつては当たり前のよう



谷水 平雄さん

あったビン玉を使って、町を元気にしようと立ち上がったのは、当時の20から40代の若い世代。旅館業・漁師・公務員などで構成されたグループは平成16年に「With・アイベ」と命名され、時には他県にまで足を延ばしてビン玉集めに奔走します。この時、古くからカツオの遠洋漁業で親交のあった宮城県気仙沼市からも寄贈されました。

しかし、割れやすいビン玉に穴を開け、中に入れたロウソクに火を付ける作業は、困難で手間のかかる作業でした。この時

志摩市観光協会の会長を務めていた谷水さんは、せっかく若者たちが始めた「ビン玉ロード」を絶やしてはいけないと考えたといひます。そこで、活動内容を引き継ぐことに。今ではLED（発光ダイオード）に替えたことで、日没から午後11時までの自動的な点灯・消灯が可能に。また、専用の機械で穴をくり抜けるようになったため、ロスが少なくなりました。

「浜島の本来のよさは、星・月・海がきれいなこと。これを大切にしないといけないと、改めて

感じています」と話す谷水さん。ビン玉の明かりを自然と融和させるアイデアも豊富で、たとえば「目戸小公園」内に設置されたモニュメント「海ほたる」は、点滅する緑色のLEDをビン玉に仕込んで表現。実際に見ると、志摩の海に漂うウミホタルの神秘的な光がイメージできました。また、ビン玉を快く寄贈してくれた気仙沼の人々との交流は、平成23年の東日本大震災以降も続き、モニュメント「絆の灯」が、今も三陸の人々にエールを送っています。

『ビン玉ロード』は、まだまだ進化の途中です。これからもっとよくなりますよ」と、谷水さん。この秋は、夜空に輝く星や月明りがさらに美しく見える浜島町へ出かけてはいかがでしょう。ビン玉の明かりも優しく揺らめいていることでしょう。

お問い合わせ

志摩市観光協会

TEL 0599・46・0570



「ビン玉ロード」から眺めた浜島の海



海中に漂うウミホタルを連想させるモニュメント「海ほたる」



ビン玉のほのかな明かりが足元を照らす



モニュメント「海ほたる」やウッドデッキなどが設置された「目戸小公園」

曾根次郎坂太郎坂、三木峠羽後峠などで心尽しのおもてなし

ルーパーの会

尾鷲市賀田町

平成16年、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された中で、三重県内を通る参詣道は熊野古道伊勢路と称されます。苔むした石畳、木々の間から望む山々や熊野灘の絶景…。各古道ごとに見ごたえがありますが、たとえば入口に置かれた手作りの杖、絶景ポイントに設置された木のベンチなどが訪問者をもてなし、今も多くの人々を惹きつけます。これらの多くは、各古道ごとに結成された地域の方々が行っています。その中で、尾鷲市内の各古道の保存活動などを行っているのが「ルーパーの会」。代表を務めるのは、ルートが判明していなかった古道を自らの手で切り開いたという大川 善士さんです。

「石仏や一里塚を見つけたり…。宝探しみたいな感覚や。おもしろいなぁ」。ある日のこと、大川さんを訪ねると、快く出迎えてくれました。活動のきっかけは、平成5年に羽後峠の整備をしたこと。この道は、市内の賀田町と古江町の間にありますが、ここで「旧熊野街道」と書かれた朽ちた標識を見つけたのです。当時は古道を歩く人もほとんどいないため、道は荒れ放題。それを見かねて草刈り機などを持参して補修作業したのが始まりだったといいます。

ちょうどそのころ、ウォーキングイベントで案内をした際に、



大川 善士さん



手作りの杖



「ルーパーの会」の皆さん手作りのベンチ



石畳が続く曾根次郎坂太郎坂



曾根次郎坂太郎坂の頂上付近からの眺め

曾根次郎坂太郎坂の一部のルートがふさがっていることを知ったことから、苦難の道のりが始まります。2メートルものシダを刈り取り、枝を払いながらの古道探し作業は、想像以上に大変だったことでしょう。時には地元の見かねて草刈り機などを持参して補修作業したのが始まりだったといいます。

ちょうどそのころ、ウォーキングイベントで案内をした際に、

間地点に「アサギマダラの里」を整備。最近では年に100頭近くが飛来し、賀田小学校の秋の遠足の際には、ここで自然観察会を行うのが恒例となっています。

本年も、アサギマダラが飛来する季節となりました。三木峠や羽後峠周辺を歩けば、優美なアサギマダラと、少年のように瞳を輝かせた大川さんに出会えるかもしれません。



「アサギマダラの里」に植えられたフジバカマ

お問い合わせ

ルーパーの会

TEL 090・9023・5376

(大川 善士さん)

先人たちの英知と努力の結晶「丸山千枚田」を未来へ

丸山千枚田保存会

一般財団法人 熊野市ふるさと振興公社

熊野市紀和町

ある初夏の日、「丸山千枚田」を訪ねると、20センチメートル程度に成長した稲穂が、山の斜面を緑色に染めていました。そ

の美しさに、しばらく見とれてしまします。

千枚田の造成が始まった時期は定かではありませんが、慶長

6（1601）年ごろには2240枚程度だったといわれます。しかし、過疎・高齢化などにより、平成初期には530枚にまで減少。これではいけないと、平成5年に地区住民が「丸山千枚田保存会」を結成。翌年には、「丸山千枚田条例」が制定されました。条例の前文の一部を読んでもみると、「幾百年もの昔、一畝ず

つ大地を起こし、石を積み上げ、土を宛がいながら営々と2200余枚を造成し、以来、今日まで休むことなく、天水を貯え、芝を刈りこんで耕作し、管理してきたのである。」と綴られています。皆さんの覚悟と気概が伝わります。

こうして保存会の人々が一丸となつて復元をめざした千枚田は、「千枚田オーナー制度」を始めたことなどもあり、現在は1340枚にまで回復しました。

「ここには、まだまだ魅力がありますよ。作業の合間を縫って、今後の夢などについて語るのは、同保存会5代目会長の喜田俊生さんです。地区外からの移住者でもある喜田さんは、だから



喜田 俊生さん



山の斜面全体に棚田が続く「丸山千枚田」



心の拠り所として慕われてきた大石

こそ気付く、魅力の掘り起こしに余念がありません。その一つが、大石にまつわる弁慶伝説。大石とは、千枚田の中央に位置する岩で、地域のシンボリック存在。そして弁慶とは、義経の家来として有名な武蔵坊弁慶のこととて、大石ともう一つの岩を弁慶がッオコ（天秤棒のこと）で担いできたという説話です。また、現在すでに固定ファンも多い「丸山千枚田米」をさらに改良する方法や、地域の人や訪問客が集う拠点作りを模索するなど、話は尽きません。

「喜田会長のアイデアは、大変参考になります」と話すのは、長野 秀信さん。千枚田の維持管理を行う一般財団法人「熊野市ふるさと振興公社」企画営業事業部公益事業グループのサブリーダーで、千枚田担当としての会の活動を支えています。そんな長野さんが、千枚田の風景の中で好きな時期として、水を張ったばかりの5月とともに挙



長野 秀信さん

げてくれたのが、意外にも2月とのこと。澄み切った空気の中、田んぼ一つひとつの形がくっきり見えるからということでした。それは保存会の皆さんが、田起こしや畔づくり、そして草刈りをすべて手作業ですることに、よって初めて見える光景なのです。平成24年、「丸山千枚田」は、公益社団法人「日本ユネスコ協会」が、100年後の日本に残したい自然、伝えたい文化として認定する「未来遺産」になりました。この貴重な遺産を、100年後の未来に残すため、今日もまた皆さんの作業が続きます。

お問い合わせ

一般財団法人熊野市ふるさと振興公社
TEL 0597・97・0640

表紙写真「丸山千枚田」（熊野市紀和町）



草取り作業